

みんなで考える、
みんなが主役になる、
みんなの新しい未来をつくる、

かんおんじ 道の駅新聞

発行人：観音寺市政策部プロジェクト推進課
発行日：令和8年（2026年）7月31日
文構成：株式会社イチバンセン

新しい道の駅「市民が主役」で街も人も元気に



たくさんの市民の皆さんにお集まり頂きました。

日本一はコスト意識と顧客満足度の徹底から

群馬県の道の駅「川場田園プラザ」は数多くのランキングで第一位を獲得しています。国道も高速道路も鉄道もない人口約2,900人（2026年5月）の小さな山奥の村にあります。道の駅は1998年に第三セクター運営方式で始まりましたが、経営が厳しくなり、運営建て直しを2007年当時の村長から私（永井）に依頼されました。一番大変だったのは、スタッフの意識改革でした。一人ひとりに丁寧にコスト意識や清掃を徹底して貰いました。次に、飲食店のメニューや売り場・パッケージのデザインも刷新し、価格に対する顧客満足度を徹底しました。地域ならではの最高の味や品質は当然ですが、高級店のようなデザインを売り場やパッケージに導入しました。現在ではリピーターも増えて、来訪者は年間290万人超、売上も順調に推移しています。 永井彰一氏（株式会社田園プラザ川場代表取締役社長）

これまで新「道の駅」について広く関心を持って頂くワークショップを実施して来ました。市民の皆さまからは、多数のご期待の声を頂いております。「すぐにでも出店したい」という熱心な声が多い一方で、中四国最大級というスローガンを掲げているので「運営は大丈夫か」というご心配の声もあります。ただ、ワークショップでも「常に主役は市民」と申し上げて参りました。この日のシンポジウムでは、これまでのワークショップに引き続き司会者の川西が市民の声を代弁するつもりで進めることにしました。以下はそれぞれのパネリストの発言の要旨をまとめたものです。（文・川西 康之）

客層に合わせて商品の価値をアップデート

新「道の駅」に出店したいと思っておられる観音寺市民の皆さまは、「客層」を見ながら商品の価値をアップデートすることが大事だと思います。安く売ろうとするのではなく、商品の価値やストーリーが伝わる空間やパッケージのデザインは顧客満足度のアップにつながります。永井彰一氏（株式会社田園プラザ川場代表取締役社長）

新「道の駅」は観光と地元日常利用のハイブリッド

私（山崎）は新「道の駅」の市民検討委員会にも委員長として携わらせて頂きました。委員会の検討当初から、かなりの計画規模を想定していたので、観光客利用と地元住民の日常利用の両方がある様々な施設の複合体というイメージが望ましいということで話を進めて来ました。 山崎隆之氏（香川大学経済学部教授）

観音寺市民が自信を持って推奨できる商品を

委員会の「観音寺で自慢できるものは何か」という議論では、観音寺まんじゅうの話題で盛り上がりました。地元の皆さんの支持があるもの、自信があるものを、市外の人たちは求めているので、新「道の駅」の商品開発に活かして欲しいです。 山崎隆之氏（香川大学経済学部教授）

観音寺市民が普段使いできる商品開発

私（中山）は、新「道の駅」の統括的な運営を担う駅長に就任する予定です。新「道の駅」は、週末の県外からの来客だけでは厳しいでしょう。現在、勤めている滝宮では地元の近隣の皆さんに平日来場して頂くために、地元のイチゴを使って、観光客のみならず、地元の皆さんが普段使いできるお茶請けやお供えに使えるものを開発しました。新「道の駅」でもこういう発想が大事です。

中山雅登氏（道の駅滝宮総支配人）

新「道の駅」は交通の結節点としても期待

新「道の駅」の近隣には病院や商業施設、公園、高速インターや鉄道駅があり、路線バスや新しいモビリティの結節点になるポテンシャルが十分にあります。これまでのワークショップでも公共交通への期待も多く寄せられており、観光の周遊や広域連携という点からも新「道の駅」が交通の結節点になることも期待したいです。

川西康之氏（株式会社イチバンセン代表取締役）

観音寺市では、令和10年度（2028年度）中の新しい「道の駅」かんおんじ（仮称・以下、新「道の駅」）の開業をめざして、作業が進められています。公募型プロポーザルにより運営事業者（指定管理候補者）は穴吹エンタープライズ株式会社（本社・高松市）に決定し、設計業務や店舗テナント募集が始まりました。【詳しくは市のホームページ等をご覧ください】

新「道の駅」は、中四国最大級をめざしています。この大きな目標は、運営事業者や観音寺市だけでは達成できません。新「道の駅」に出店あるいは商品を提供して頂く市民の皆さま、企業や団体の皆さまと一緒に作り上げなければなりません。多くの市民の皆さんに道の駅について関心を持って頂き、参加して頂くことが基礎になります。そう願いを込めて、日本一の道の駅をつくり上げた講師や新「道の駅」の関係者らをお招きしたシンポジウムを5月24日（日曜日）に開催しました。



官民一体で宝物をみつけて磨いてゆく

観音寺市には本当に宝がいっぱいあります。でも、人口減少と少子高齢化で自信を失っているように思います。道の駅はその起爆剤です。持続可能なまちづくりを進めるべく市政運営に取り組むなかで、新「道の駅」をどのように活用してゆくか。行政が商売をやるのではなく、民間事業者の素晴らしいお力を借りて、官民一緒に進めたい。

佐伯明浩氏（観音寺市長）

道の駅も観光も広域連携がカギ

私（守谷）は道の駅ことひきの運営に携わりながら、観光協会の会長として、市の観光振興に注力しています。ここ数年、天空の鳥居が大きなブームとなり、週末を中心に多くの来客があります。これは観音寺市内だけではなく、三豊市も含めて周遊されているから、賑わいが増加しているのだと思います。新「道の駅」は市内で3箇所目の道の駅となりますが、お遍路のおもてなし文化も含めて周遊・連携することで相乗効果が生まれると期待しています。

守谷通氏（一般社団法人観音寺市観光協会会長・道の駅ことひき）

近隣の既存道の駅もアップデートが必要

私（白井）が駅長を務める道の駅とよはまは開業約30年、観音寺市の西の端、愛媛県との県境に近い場所にあり、併設されているオーシャン食堂では、自ら腕を振るって海、山、旬の恵みをふんだんに盛り込んだ食事を提供しています。正直、本当に共存できるのかという不安はありますが、新「道の駅」と同じことをしてはいけません。とよはまも新しい作り方をしようと考えています。白井秀樹氏（道の駅とよはま駅長）

市民一人ひとりの大好きが集積した道の駅へ

わざわざ行ってみたいと思う動機は「景色」よりも「人」だそうです。あの人の接客があるから、行ってみたい街や店になります。新「道の駅」で大事な要素は人のコミュニケーションであり、それがリピーターを生みます。新「道の駅」は幅広い世代が遊べる、コミュニケーションが豊かな空間になって欲しい。市民一人ひとりの「大好き」が集積した道の駅が望ましいですね。どうか観音寺市民の皆さま、新「道の駅」にお力添えをお願いします。市長の言われる通り、道の駅を切っ掛けに、この観音寺市で夢を語ることはとても大切です。 川西康之氏（株式会社イチバンセン代表取締役）